

## 霧氷

池田 隆

穏やかな真冬日の朝、山荘のカーテンを開けると落葉松林が白銀に染まっている。地面に雪はない。滅多に見ない霧氷である。外に出て目を凝らすと、枯れ枝に数ミリの氷柱が体毛のように無数付着している。

写真に撮り、親友T君に「学生時代に貴兄と九州旅行へ出掛けた際、雲仙で見た霧氷を思い出した」という添え書をつけてメールを送った。すると彼より「違つよ、見事な霧氷を見たのはその後で登った霧島の韓国岳だよ。雲仙では白骨死体を見つけたではないか」の返事。

そう私の記憶違いだった！

忘却の彼方にあつた白骨死体の発見事件が頭に甦る。

普賢岳に登山後、仲間三人でショートカットしようと仁田峠よりゴルフ場に向かって道なき山斜面を下り始めた。藪漕ぎしながらルートを探していると、盛り上がった箇所には枝ぶりの立派な一本の松の木を見つけた。

見晴らしが利くだろうと、その根元まで来ると足元に古びた衣服や革靴が落ちている。周りに目をやると白骨化した髑髏や骨が散らばっている。真上の太い枝からは切れた紐が垂れ下がっている。

三人は慌てて斜面を駆け下り、町の派出所へ飛び込み報告した。警官より細かい調書を取られ、彼らを案内して再び現場へ向かうこととなった。しかし滑るように急斜面の山林を下りたので、来たルートをよく覚えていないし、件の松も見つからない。さぞ警官を引き回した後、ようやく到着。警官は慣れているのか、冷静だ。

「首吊りしてから一年は経っているな」と言って、持ってきた透明なビニール袋に髑髏や白骨を無造作に放り入れ、靴に残っていた靴下を振ると足の指がぼろぼろと落ちて来た。骨が散らばっているのは野犬のせいだという。

翌日の地方紙の片隅に自殺者の白骨発見者として私の名前が載ったらしい。それを見た長崎の知人から、「白骨を見つけると、何か好運に出会うと昔から言うよ」と冷やかされた。あの韓国岳の一面真白な霧氷林がその好運だったのか、六十数年後にやっと気がついた。